



TITLE:

転職による転機と当事者の解釈過程: ライフコース論の方法論的検討

AUTHOR(S):

太郎丸, 博

CITATION:

太郎丸, 博. 転職による転機と当事者の解釈過程: ライフコース論の方法論的検討. 年報人間科学 1995, 16: 57-73

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/120964>

RIGHT:

(c) 1995 大阪大学人間科学部



大阪大学人間科学部
『年報人間科学』第16号 一九九五年三月

転職による転職と当事者の解釈過程
——ライフコース論の方法論的検討——

太郎丸
博

転職による転機と当事者の解釈過程

ライフコース論の方法論的検討

〈要旨〉

本稿の目的は、1. 転職を通じた人生の転機がいつ起きるのか、2. 転職を通じた人生の転機（以下、「転機」）はどのような内容であるか、を明らかにすることである。これまで、ライフコース研究における変数指向的アプローチは「客観的」変数を好んで分析してきたため、「転機」のような当事者の解釈が混入する事象は分析してこなかった。しかし、本稿では、そのような当事者の解釈過程こそ重要な分析対象と判断した。なぜなら、ライフコースとは、単なる「客観的」出来事の継起ではなく、当事者の解釈による修辭的構築物だからである。

そこで、第一に、イベントヒストリー分析を用いて、男女別、現職別に「転機」の起きる年の分布を比較した。その結果、検定では帰無仮説は棄却されなかったけれども、性別によって明らかな分布の形の違いが見られた。また、現職によっても分布の形に違いが見られた。第二に、「転機」の内容についての自由回答を分析した。その結果、自由回答の修辭的な特徴と、性別、学歴との間に、有意な関連が見られた。

キーワード

ライフコース、転職、転機、自由回答の分析、レトリック

太郎丸 博

人生には様々な転機が訪れる。このような転機となる出来事の一つが転職だろう。本稿の目的は、いつ、どのように転職によって人生の転機が訪れるのかを明らかにすることである。我々がライフコース上の転機について研究する場合、いつ転機が起きるかだけでなく、どのような内容の転機が起きるかについてもわかるほうが望ましい。したがって、転職による人生の転機の時期と内容が、性別や職業、といった基本的な諸属性によってどのように異なるかを分析することが、本稿の具体的な分析課題となる。

そこで、第一節では、先行研究の分析対象と方法について概観し、本稿の分析対象と方法の特徴を明らかにする。第二節では分析に用いるデータの性質について述べ、第三節では転職を迎える時期について、性別、職種間の比較を行なう。そして第四節で、転職によってどのように生き方が変わったと人々が解釈しているかを分析する。

一 先行研究の方法・対象と本稿の特徴

本稿の議論は、ライフコース論、ライフサイクル論、あるいはライフヒストリー論（以下「ライフコース論」で一括）といった議論の流れの中に位置付けることができる。ライフコース論は、基礎とする方法論によって、大まかに二つのアプローチに分けられると思われる^①。第一は、事例指向アプローチ、第二は変数指向アプローチである。以下に本稿の特徴づけに必要な限りにおいて、この二つの

アプローチの方法とその長短について述べる^②。

事例指向アプローチの一般的方法は、有為抽出された少数の人々に、かなり自由に自分の人生について語ってもらうというものである。インタビューは一人当り合計十数時間に及ぶ場合もしばしばある。そのため調査者と被調査者がかなり突っ込んだ話をする事が可能になる。例えば、いつ、どんな仕事から、どんな仕事へ転職したかということだけではなく、その理由やそのときの気持ち、そして、今（調査が行われた時点）から振り返ってみて、その転職によって自分（被調査者）の生き方がどう変わったと思うかなどについても柔軟に尋ねることができる。したがって、被調査者のこれまでの人生の過程について、かなり包括的に理解することができる。事例指向アプローチには、このような長所があるにもかかわらず、以下のような欠点もある。第一に、少数の有為抽出されたサンプルを用いるので、せっかく優れた仮説が得られても、母集団に対する一般化がどの程度可能なのかまったくわからない。さらに、質問の仕方が柔軟である（被調査者ごとに違う）ために事例（被調査者）間の比較の妥当性が低いということである。すなわち、ライフコース論におけるデータは調査者と被調査者の共同作業によって作り上げられるものだが、質問の仕方が被調査者ごとに違うと、事例間を比較した場合、事例間の違同が、調査者の質問の仕方に起因するのか、それとも事例の特性に起因するのか、まったく判別できないのである。

これに対して、変数指向アプローチの一般的方法は、無作為抽出

された比較的多数の人々に、構造化された質問票を用いて、様々な質問をするというものである。このことによって、事例間の比較はもちろんのこと、母集団に対して、様々な仮説の検定やモデルの推定を行うことができる。しかしながら、通常、一回の調査で質問できることは限られており、被調査者の人生のある側面しかわからないことになる。また、あらかじめ質問文を決めてしまうために、事例指向アプローチならば発見できたであろう、さまざまな事例の特性を見逃す可能性が十分にある。したがって、事例を包括的に理解することはほとんど不可能であり、高々いくつかの変数間の関係について知りうるのみである。

本稿の議論は、変数指向アプローチに属するけれども、分析対象が従来の変数指向アプローチとは異なる。むしろ、分析対象という点では事例指向アプローチに近い。すなわち、従来のライフコース論における変数指向アプローチは、ライフコース上のかなり「客観的」出来事を好んで分析の対象としてきた。結婚、子供の出生、転職などを経験した年齢のように、被調査者の「主観」の入り込む余地が少ない変数について尋ねて、その他の諸属性との関連を調べてきたわけである。それに対して、本稿では、そのような出来事に対する被調査者自身の解釈を分析対象として重視する。転職によって転職を迎えた被調査者が自分自身の人生について解釈する場合もあれば、そうでない場合もありうる。そのような解釈の異なる転職をすべて等しく扱うことは、ライフコース論の文脈においては、必ずしも妥当とは言えない。われわれがここで研究したいライフコー

スとは、単に「客観的」出来事からのみ構成されるものではなく、そのような出来事に対する人々の解釈をもその重要な構成要素とするものである (Hughes 1958, Berger & Luckmann 1966, Plath 1983)。したがって、本稿で注目するのは、転職のうちでも最も人生の転機になった(と被調査者が調査時点において解釈する)転職であり、その転職によってどのようにその人の生き方が変わった(と被調査者が語る)かである。

このような被調査者自身の解釈や語り口を重視する考え方は、事例指向アプローチのうちでも、Plath (1980) の考え方に最も近い。Plath (1980) は自分の研究を「成熟のレトリック」に関するものと語った。被調査者が自分の人生について語る事柄は、ライフコースを構成する出来事に関する「客観的」情報というよりは、被調査者の解釈過程なのであり、それは被調査者の語り口の中に現われるという考えが、この「成熟のレトリック」という言葉には込められているように思われる。だとすれば、本稿では、被調査者のこれまでの人生全体ではなく、転職に限定して分析を行うのだから、いわば、「転職のレトリック」こそが本稿の分析対象だといえるだろう。もちろん本稿で扱うデータはレトリックというにはあまりに断片的かもしれない。しかし「コミュニケーションにおいて、どのような事柄に対して、どのような言葉を用いて語るのか」ということにまでレトリックという概念を広げることが、それほど無理なことではあるまい。

レトリックは、個々人の現実感覚や言説を操る能力にもとづく

いう点で個人的である。しかしそれは、人々が共有する知識や信念を基礎としなければならないという点で社会的なものでもある (Petelman 1977, 土屋 一九八五)。人々が用いる言葉の断片、その言葉の選び方そのものにレトリックを見い出そうというのが本稿の視点である。

したがって本稿は方法論的には変数指向的アプローチに属しながらも、分析対象、そしてライフコースに対する考え方においては、事例指向アプローチ、とりわけ Plath (1980, 1983) の流れを汲むことになる。

二 データの性質

今回用いるデータは、大阪大学人間科学部経験社会学・社会調査法講座によって一九八八年に島根で行なわれた、『職業と新価値観の形成調査』(代表・直井優) によって得られたものである(直井・佐藤 一九九五)。分析の焦点となるのは、転職に関する以下の二つの質問項目である。(いづれも四〇才以上の転職経験者に対して)「あなたの生き方に一番大きな変化を与えた転職は何歳の時ですか。」つづけて「その転職によって、どういう生き方から、どういう生き方になりましたか。」と自由回答法で問うている。前者を『転職の年』、後者を『生き方の変化内容』と呼ぶことにしよう。

ここで気をつけなければならないのは、どちらも決して「客観的」な回答ではなく、回答者の自分自身の人生に対する解釈過程である

という点である。たしかに『転職の年』は実際に転職した時期を反映しているけれども、複数回転職した場合、どの転職を「転職」とみなすかは、回答者の解釈にかかっている。また後に見るように、そもそも「転職」とは何かという点に関しても、回答者の解釈が色濃く反映することになる。兵役から帰ってきて職につくのは「転職」なのだろうか？ 結婚して主婦になる場合「転職」と言えるのだろうか？ 繰り返しになるが、このような事柄に対する回答者の解釈そのものがわれわれの研究対象なのである。ただし、『転職の年』に関しては次のような点に注意していただきたい。すなわち、調査時点で、四〇歳の人は五〇歳で転職を迎えたとは答えない。〇〜四〇歳の間のうちのどれかを選ぶだろう。ところが、仮に二〇年後にもう一度同じ質問を同じ人にした場合、五〇歳と答えるかもしれない。すなわちこの変数は年齢の影響を強く受けている可能性が高いのである。

もう一つ気をつけておくべきことは、転職と人生の転職の関係である。人生の様々な出来事は、論理的には、人生の転職かどうか、転職かどうかで四種類に分類できる(表1)。すなわち、1. 人生の転職となるような転職。2. 転職以外の、人生の転職となるような出来事(結婚、等)。3. 人生の転職とはならないような転職。4. 転職以外の、人生の転職とはならない出来事。

本稿の分析はあくまで、1. 人生の転職となるような転職のみを対象とするのであって、他の三つはすべて分析から除外されている。ライフコース論にとっては、転職以外の人生の転職にも重要な意義

表 1 転職×転機

	転職	転職以外の出来事
人生の転機	1. 人生の転機となるような転職	2. 転職以外の、人生の転機となるような出来事（結婚、等）
転機以外の出来事	3. 人生の転機とはならないような転職	4. 転職以外の、人生の転機とはならない出来事

ながら測定されていない。したがって以下の分析では、上の二つの変数とフェイスシートに当たる諸変数（とりわけ、性別）との関係を見てみることにしよう。

がある。しかし、人生の転機全般について尋ねると、回答があまりにも多岐にわかれ、分析が困難になる可能性が高い。そのため今回の調査では、人生の転機全般について尋ねることは見送られている。以下では、1. をかきかっこをつけて「転機」と表記し、1. と 2. をあわせて転職全般を、単に転職と表記することにする。

回答数は、四〇才以上の転職経験者一六三人のうち『転機の年』が一四二（回答率 八七・一％）、『生き方の変化内容』が一〇〇（回答率 六一・三％）である。

比較的「難しい」質問であるわりには高い回答率であるといえる。しかし、回答の絶対数があまり多くない。また、今回の調査は元来ライフコース研究を目的とするものではないため、職歴やライフイベント（結婚、出産など）の時期は残念ながら

三 転機の年

三、一 取り扱う命題

最初に述べたように、本稿で取り扱われる問題は、いつ、どのような「転機」が訪れるのかについてである。このような問題に関する先行研究の諸仮説を検討してみる必要がある。しかし、事例指向アプローチは個人々々の人生を包括的に理解することを目的とすることが多いため、仮説―検証を意識した命題をたてることが少ない。大まかには、1. 文化、2. 社会構造、3. コーホート、といった社会的要因が人々のライフコースに影響を与えるというのが、ライフコース論の基本的な知見だといえる（森岡・青井 一九八四、一九八七）。

このような議論の状況の中で、転職の起こる年についてかなり明確な仮説を提示しているのが、レヴィンソンのライフサイクル仮説である。彼は、男性の成人期を、1. 成人前期、2. 中年期、3. 老年期の三つに分けている（Levinson 1978）。レヴィンソンによれば、男性は各段階の移行期に人生の大きな転機を迎え、それ以外の時期（便宜的に安定期と呼んでおこう）は比較的安定している。このような転機は必ずしも転職だけとは限らない。しかし、転職の種類による交互作用効果については特に言及されていない。したがって、「転職による転機においても、安定期にくらべると、移行期には転機が起こる確率が上がる」という仮説が、レヴィンソンの議論から

導きだせる。

コーホート等の基本的変数をコントロールして分析するのが望ましいけれども、今回はデータの制約から、社会空間上に人々が占める位置(Sorokin 1959)、とりわけ、性別・職業との関係に限って分析することにする。

三、二 性別と『転機の年』

それでは、人々はいっ「転機」を迎えるのだろうか。男女別に表したのが表2である。表2を見ると、男性のちょうど半分が二九歳より以前に転機を迎えたと述べている。以下、年を追うごとに次第に転機を迎える確率が下がっている。これに対して女性は、三〇歳代でピークを持つ山形になっているのが解かる。年齢のカテゴリ分けが、二九歳以下、三〇歳代、四〇歳代、五〇歳以上となっているのは、一〇代と六〇代で転機を迎えた人が、少ない(一〇代が六人、六〇代が二人)ためである。一〇代と六〇代のカテゴリを独立に作ってもカイ二乗検定が困難にな

表2 性別と転機の年

	転機の年				() 内%
	29歳以下	30歳代	40歳代	50歳以上	計
男性	41 (50.0)	17 (20.7)	14 (17.1)	10 (12.2)	82
女性	17 (28.3)	25 (41.7)	14 (23.3)	4 (6.7)	60
計	58	42	28	14	142

$$\chi^2=10.88^*$$

$$\text{Cramer's } V=.28^*$$

* は5%水準で有意。 ** は1%水準で有意。

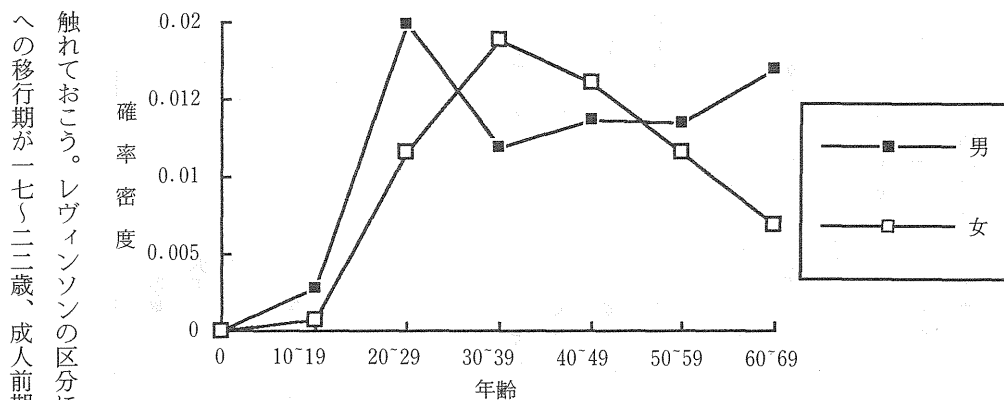
るだけである。

先に指摘しておいたように、転機の年には年齢が大きな効果をおよぼしている。調査時点でも、転機という形で転機を迎えていなかった人は、表2では分析から除外してある。しかし、少なくとも調査時点までは、「転機」を迎えていなかったということは有意な情報であるし、近い将来、『転機の年』を迎える可能性もある。

このような問題を考慮して、イベントヒストリー分析の一種を用いる。イベントヒストリー分析では、通常、非該当とするようなデータの情報も分析に含めることができる。四〇歳以上で転機経験のない者と『転機内容』に「変化なし」と答えた者は、少なくともその年までは、転機という形で転機を迎えていなかったけれども、今後大きな転機を迎える可能性があるのである。①このような情報をも含めて作られたのが、図1である。

図1は、一〇年ごとに、その一〇年の間に「転機」を迎える確率密度を表わしている。平均をとると、男性も女性も転機を迎える時期はそれほど変わらない。しかし、図1からわかるように、その分布の形ははっきりと異なっている。女性が三〇代でピークをむかえたあと、転機をむかえる確率は次第に下がっていくのに対して、男性が二〇代でピークをむかえ、以下横ばいとなったあと、六〇代で再び上昇に転じている。

このような男女間の違いはたいへん興味深い。男女間の違いが何に起因するのかは今回のデータからは残念ながらわからない。しかし、以下のような常識的な推測をすることは可能である。すなわち、



D=2.031

図1 性別と転職の年(1)

男性は二〇代で主要な職業を決定し、その後は(転職という形で)「転職」はあまり迎えない。しかし、六〇代で、その主要な職業を退職することを余儀なくされ、新たな職に移る。この主要な職業に入るときと、退くときに転職を迎えるのではないか、というわけである。女性の場合、結婚後、おそらくは子供をうんだ後の職業選択が決定的である、と考えられる。繰り返すが、これは単なる推測にすぎない。

次にレヴィンソンのライフサイクル仮説に

四五歳、中年期から、老年期への移行期が六〇〜六五歳となる。この移行期の間が安定期ということになる。このようなレヴィンソンの区分にしたがって、図1を区分けし直して図示したのが図2である。

もしもレヴィンソンの仮説が正しければ、男性の分布の形は、移行期で高く、安定期で低いという、でこぼこの形になるはずである。しかし、図2はそうはなっていない。それは、二三〜三九歳の安

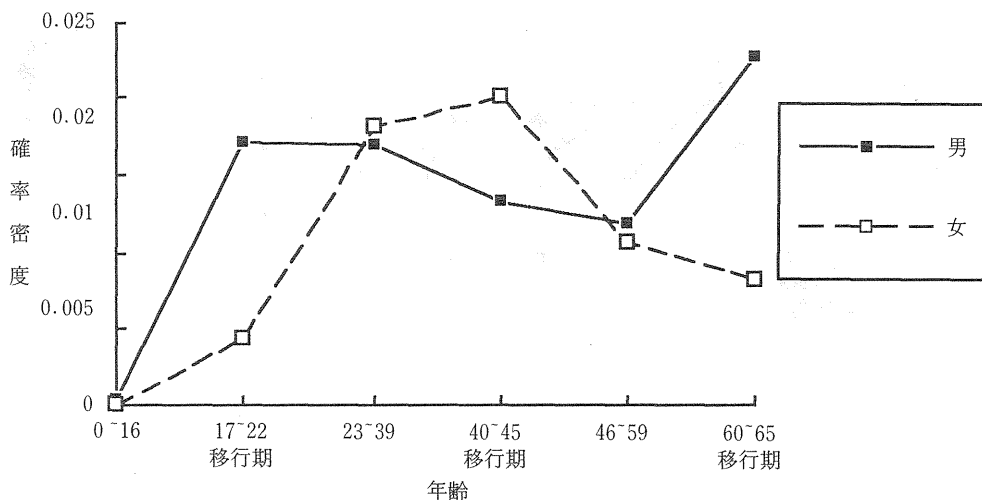
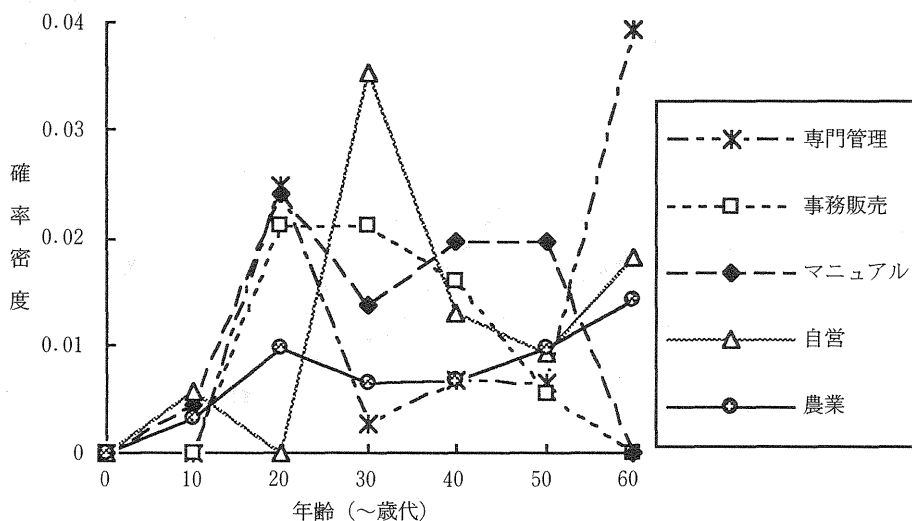


図2 性別と転職の年(2)

定期で予想よりも高く、四〇〜四五歳の移行期で予想より低い
ためである。しかしレヴィンソンの仮説は完全にはずれたわけではない。
成人前期への移行期、老年期への移行期で「転機」の確率は高まっ
ているし、中年期では「転機」の起こる確率はもっとも低い。この
ように、レヴィンソン仮説は、部分的には支持されるものの、全体
としては支持できない。レヴィンソン仮説があまりうまく当てはま
らない理由としては、日米間の雇用慣行や労働市場の構造等の違い
がまず考えられる。また、転機の種類による交互作用効果があるか
もしれない。あるいは、プラスのいうように「成熟のレトリック」
の違いに起因するのかもしれない。いずれにしろ、これまでのライ
フサイクル論批判で言われてきたように、レヴィンソン仮説は修正
の必要がありそうである (Clausen 1986)。

女性の分布については、図1と図2を比べると、グラフの頂上の
位置が、右に(三〇〜三九歳から四〇〜四五歳へ)ずれている点が
興味深い。インターバルの区切り方によってこのようなちがいがで
てくることは、慎重にインターバルを区切る必要があることを示し
ている。しかし、それ以上に興味深いのは、中年期への移行におい
て「転機」を迎えるのは男性ではなくむしろ女性であるということ
である。しばしば、女性のライフステージにおける大きな区切りと
して、結婚と出産が言及される。しかし、職業上の転機に限ってみ
れば、四〇〜四五歳こそが重要な転機となるのである。その理由と
しては、子供の年齢などが考えられけれども、今後慎重な検討が必
要だろう。

三三 職業と『転機の年』



$D=15.476^{**}$

図3 職業と転機の年

次に現在の職業別に見てみよう。職業は、1 専門・管理、2 事務

・販売、3 マニユアル、4 自営、5 農業、の5つに分類した。図3を見ると現職の間に明らかなパターンの違いが見られる。その中で、理解しやすいのは自営業である。自営業は三〇代に大きなピークを迎えている。おそらくは三〇代で、独立したり、親のあとをつぐ場合が多いと推測されるけれども、推測の域を出ない。もう一つ興味深い分布の形をしているのが専門・管理である。二〇代と六〇代でピークを迎えている。これは図1の男性の分布の形をよりはっきりとした形で示している。これは性別と職業の関連を反映していると思われるが、これ以上の分析は難しいだろう。

いずれにしろ、「転機」を迎える時期は、人々の社会生活間上での位置によって明らかに異なることが経験的に確かめられた。それでは、このような「転機」によってどのように生き方が変化するのだろうか。これが以下の議論の主題である。

四 生き方の変化の内容

以下自由回答『生き方の変化内容』について吟味していく。以下では該当する事例については全て本文中で挙げることにする。例えば最初に抑留体験の事例が一つ挙げられている。これは、抑留体験に言及しているのはただ一事例であるということを示している。同様に「中心」という言葉を使った事例は五つ挙げられているが、やはりこれで全てである。どのような類型を作るにしろ、該当する事例は非常に少ない。したがって分析の方針としては、ある修辭的な

特徴に注目し、類型を構成した上で、その類型に該当する事例の共通の特徴を探索することにした。具体的には、2×2のクロス表を作って最大関連となるような特徴Ⅱ変数を探索することにした。このようにして、「中心」、「安定」という語が注目されることになった。しかし、修辭的な特徴を検討する前に、この節であつかう「転機」の意味について考えてみなければならぬ。なぜなら、「転機」をどう定義するかで——具体的には当事者のカテゴリーを積極的に分析に取り入れるかどうかで——以下の議論が大きく異なってくるからである。

四 一 「転機」とはどういうことか？

普通、転機とはある職業から別の職業に変わることを言う。しかし、これには様々な境界的な事例が存在する。当然のことながら、社会学者や経済学者が「転機」と見なす事柄と、当事者が「転機」と見なす事柄は、必ずしも一致しない。例えば、戦争時の抑留体験を挙げている人がいる。

778「軍人、抑留」から「帰国後就職」へ（男・現六四歳・二〇歳時体験）。

さて、これは「転機」だろうか？ もちろん彼は、徴兵によって戦争に行ったのではなく、元来、職業軍人だったのかもしれない。だとすれば、通常研究者が「転機」と見なす事柄と一致する。しかし、

もし彼が徴兵以前に別の職業にしていたとすれば、どうだろうか？

また、仕事をやめて専業主婦になるのは「転職」だろうか？

182 「看護婦」から「専業主婦」へ（女・現六七歳・二五歳時体験）。

あるいは退職はどうだろうか。

176 「三年の教職」から「年金生活」へ（女・現六三歳・五五歳時体験）。

350 「会社を退職して」から「老後の自由生活」へ（女・現六二歳・六一歳時体験）。

再就職を「転職」としてあげる人も多い。

143 「主婦」から「自営業」へ（女・現四三歳・三八歳時体験）。

265 「専業主婦」から「仕事と家庭の両立する生活」へ（女・現

四一歳・三九歳時体験）。

289 「主婦専業」から「職業婦人」へ（女・現四六歳・三七歳時体験）。

309 「主婦業」から「主婦兼、勤め人」へ（女・現五一歳・三五歳時体験）。

312 「主婦」から「会社員」へ（女・現五一歳・四四歳時体験）。

331 「子育ても終わり、何不自由なくしていた」主婦」から「何

十人も使用者を従い、人間関係のむずかしさ」へ（女・現

五六歳・四五歳時体験）。

まずわれわれが最初に確認しなければならないことは、このような境界的事例をすべて「転職」（による生き方の変化）と見なすということである。もちろんこのような境界的事例のいくつかを無効な回答と見なして切り捨ててすることはたやすい。実際、分析の目的によっては切り捨てなければならぬ場合もあるだろう。しかし、最初に述べたように、本稿の分析対象は、当事者の解釈過程である。このような観点に立てば、何が「転職」であるかは、研究者が一方的に決めることはできない。「転職」とは当事者が修辭的に構成するものなのである。

これに対して次のような反論がなされるかもしれない。「これらの境界的な回答は、質問の意味を勘違いした答えである。転職でどのように生き方が変化したかを尋ねているにもかかわらず、生き方の変化一般について尋ねられたと勘違いしたに違いない。」もちろんそのような可能性は常に存在する。しかし、このような「誤った」回答が含まれている可能性は、何もこの質問項目『生き方の変化内容』に限ったことではない。『学歴』や『収入』にも常に「誤った」回答が含まれている可能性が存在する。しかし、あくまで答えられた回答は、「誤っていない」と見なすのが、通常の社会調査における

分析方針である。本稿はそのような通常の社会調査の分析と何ら変わりはないのである。

また、次のような点も指摘しておこう。この質問項目の前には、『就業形態』『産業分類』『従業先の規模』『職業分類』『役職』『就業年数』『転職経験』『転職回数』『転職の年』の順に質問がなされている。したがって、この質問項目には、「転職」をいわゆる賃労働（金銭的な報酬を得られる職業）から賃労働への転職と見なすようなキャリアオーバー効果が明らかにかかっている。それにもかかわらず、既に挙げたような境界的な回答が返ってきたのである。このような文脈においては「生き方の変化一般について尋ねられたと勘違いしたに違いない。」とは考えにくい。したがって、研究者の視点からすれば一見無効とも思える回答も、全て分析に含むにたる有効な回答とすることにする。われわれの観点から見れば、「正しい」レトリックなど問題にならない。むしろ、うまいレトリック、説得力のあるレトリックこそ取り上げるにたる分析対象なのである。

四 二 主婦という「職業」

ここで境界的な事例の定義をしておこう。境界的な事例とは、「転職前後に金銭的な報酬を得られるような職業に従事していなかったと解釈できるような事例」のことである。このような境界的な事例は、最初にあげた抑留体験の事例を除いてすべて女性である（表3参照）。このことは女性の労働市場における周辺の位置を反映して

表3 事例の境界性と性別

() 内%			
	標準的事例	境界的事例	計
男性	59(98.3)	1(1.7)	60
女性	30(75.0)	10(25.0)	40
計	89	11	100

$$\chi^2=13.3^{**}$$

$$\phi=.37^{**}$$

いるとも思える。

しかも境界的な事例である女性には、もう一つ共通の特性がある。すなわち、すべて主婦という職業からの／への転職であるという点である。退職の二つの事例では、「主婦」という言葉は使われていない。彼女たちは、「年金生活」「老後の自由生活」へ移行したと言っているのであって、「主婦」になったとは言っていない。しかし、彼女たちがそのような自分たちの生き方の変化をあくまで転職によるものと語っていることに注目したい。彼女

たちは、退職した後、何らかの別の職業につく（すなわち転職することによって「年金生活」「老後の自由生活」へと生き方が変化したと語っている）のである。だとすれば、その何らかの別の職業とは、「主婦」業だと考えるのが自然である。

これに関連して次の点を指摘しておきたい。退職に言及した事例は上に挙げた二つだけである。これがいずれも女性であり、男性は一人も退職に言及していないという点である。このことに関して次のような推測が可能だ。「見田（一九六五）でも指摘されているように、退職はむしろ日本のサラリーマン＝男性にとって大きな転職と思われる。それにもかかわらず、男性の回答者が一人も退職に言

及していないのは、男性にとっては退職は転職ではないからである。彼らは仕事をやめた後、主夫業という新たな職業に就くのではない。彼らは文字どおり職から退くのだ。“というわけである。

さらに次のような事例を見ていただきたい。

160 「退職して結婚、そして離婚したので」「無職になり人が信
用できなくなった」(女・現五三歳・三八歳時体験)。

彼女のレトリックの興味深い点は、「離婚したので無職にな」った
と言っている点である。逆に言えば、彼女は離婚しなければ無職に
はならなかったのだ。それはおそらく、主婦が立派な職業だ(と当
事者によって解釈されている)からだ。

これに対して、男性はまったく結婚へは言及していない。もしか
したら、結婚は「安定」な職業へと転職させるような間接的な要因
となるのかもしれない。しかし、男性が修辭的に作りだす「転職機
」には決して結婚の二文字は出てこない。彼らの生活世界の内部では、
仕事と家庭は画然と分けられているのだろうか。

以上の議論をまとめると、境界的な事例は、男性の場合(一つし
か事例はないが)兵役を職業と見なすことから生じており、女性の
場合、主婦を職業と見なすことから生じていると言える。

四三 「中心」のレトリック

それでは、実際にどのようなレトリックが用いられているのだら

うか。『生き方の変化内容』に対する回答は多岐にわたっている。
中には、どのように生き方が変化したのか明確に伝わってこないよ
うな事例も多い。たとえば、次のような事例である。

487 「民間会社」から「団体職員」へ(男・現四七歳・体験時三
五歳)。

322 「小人員会社」から「大人員会社」へ(女・現五四歳・四四
歳時体験)。

これらの事例は、おそらく従業先の形態に対応して自分の生き方が
変化したということが言いたいのだろう。けれども、実際にどのよ
うに変化したのかは、生活世界(あるいはトポス)^①を共有していな
い者にはわかりづらい。

こういった事例の中で、比較的分かりやすいのは「中心」のレト
リックを用いた事例である。「中心」のレトリックとは、自分の生
活の中心の移行に言及することで、生き方の変化を表わすようなレ
トリックのことであると定義しよう。操作的には「中心」という言
葉を用いている事例を「中心」のレトリックを用いた事例と定義す
ることにする。^②これは、自分の生活の中心の移行に言及する以外に
は、「中心」という言葉を用いている事例が無かったからである。

このような中心の移行にはかなりの共通性がある。

258 「家族中心」から「自分中心」へ(女・現四〇歳・二〇歳時

体験。

260 「家庭中心、主人、子供中心で自分がなかった」から「自分に自信がもてて楽しい」へ（女・現四〇歳・四〇歳時体験）。

298 「（仕事）会社勤」から「家庭中心」へ（女・現四八歳・二五歳時体験）。

493 「子供中心、がむしゃらな生き方」から「目的願望の生き方」へ（男・現四九歳・四二歳時体験）。

730 「自分のことを中心に考えればよかった」から「従業員やその家族を気づかうようになった」へ（男・現五一歳・五一歳時体験）。

このような事例を眺めていて気付くことは、「中心」のレトリックで主に扱われているのは、個人志向／集合体志向というパターン変数と、仕事／家庭という対立軸である。

また、全員が新制高校卒というのも興味深い（表4参照）。身に付けた知識あるいは学校文化によって語彙が異なるということだろうか。いずれにしろ、このような特徴を単なる語彙の違いに過ぎないと考えてはなるまい。当事者によって修辭的に構築されるライ

表4 学歴と中心のレトリック

	() 内%		
	中心のレトリック	その他	計
新制高校卒	5 (14.3)	30 (87.5)	35
その他	0 (0)	61 (100)	61
計	5	91	96

$$\chi^2 = 9.2^{**}$$

$$\phi = -.31^{**}$$

フコース上の「転機」自体の違いであると考えるべきであろう。

四・四 「安定」のレトリック

もう一つの修辭的特徴は、「安定」への言及である。

470 「安定した会社からただ同じ仕事をしているだけ」から「今日、明日生きるために働きたいがある」へ（男・現四〇歳・三八歳時体験）。

473 「不安定高収入」から「安定収入」へ（男・現四一歳・二二歳時体験）。

497 「不安定収入、習得技術、人生経験」から「安定収入、精進指導」へ（男・現五二歳・四二歳時体験）。

498 「左官業」から「年中安定した仕事、農協」へ（男・現五三歳・二八歳時体験）。

603 「戦時中の転職も戦後自由業」から「安定した職場」へ（男・現五三歳・二八歳時体験）。

607 「生活不安定」から「安定」へ（男・現六二歳・三〇歳時体験）。

609 「収入が少なくても、自分のやりたい職業を通したいという考え方」から「現実収入が安定し妻子をやしなえる生き方」へ（男・現四二歳・二八歳時体験）。

760 「収入不安定」から「安定職」へ（男・現五八歳・四二歳時体験）。

表5 性別と安定のレトリック

	() 内%	
	安定のレトリック	その他 計
男性	10(16.7)	50(83.3) 60
女性	0(0)	40(100) 40
計	10	90 100

$$\chi^2=7.4^{**}$$

$$\phi=.27^{**}$$

安定のレトリックは男性に特有のものである(表5参照)。大部分が収入または生活全般の安定に言及していることを考え合わせると、「生活を経済的に安定させなければならない」という男性役割を反映していると思われる。「中心」にしろ、「安定」にしろ、社会空間を構成する軸(それぞれ、学歴、性別)に有意に関連するものであった。すなわち、当事者の解釈過程を通して修辭的に構成される「転機」は、その時期だけでなく、内容においても

795 「不適職のため行先の不安」から「適職、生活安定」へ(男・現四一歳・二二歳時体験)。

813 「不安」から「安定」へ(男・現四一歳・四一歳時体験)。

社会空間上の位置と関連するのである。

むすびにかえて

普通、遡及データはその妥当性・信頼性に問題があるとされる。実際、二〇歳時の転職による生活構造の変化の程度と、四〇歳時の転職による生活構造の変化の程度を比較することなどほとんど不可能であるように思われる。そのため、人生の転機に関する計量的な研究はこれまでまったくなされてこなかった。しかし、「転機」を人々が修辭的に構成する「現実」であると解釈すれば、新たな問題領域が開ける。本稿ではこのような視座から、「転機」の年、転職による生き方の変化について解釈を加えてきた。その結果、いくつかの暫定的な仮説、ないしは仮説の反証が得られた。1. 「転機」を迎える時期は性別によって異なる。2. レヴィンソン仮説は修正の必要がある。3. 「転機」を迎える時期は現職によって異なる。4. 境界的な事例は女性に多い。5. 「中心」のレトリックは新制高校卒の回答者に多い。6. 「安定」のレトリックは男性に多い。

今後の課題としては、多変量解析を用いて、より精密な分析を行うことが必要だろう。あるいは、コーホートをコントロールして分析を行なうことも重要である。また、もっと長文の回答を得ることで、複雑なレトリックについて研究することも重要な課題だろう。本稿で分析したレトリックは、「レトリック」というには、いささか断片的であるという限界があるからである。

しかし、本稿の成果として強調したいのは、ライフコースに関する当事者の解釈について、反証可能な形で仮説を提示した点である。本稿で提示された仮説への批判・支持・修正を通して、より一層ライフコース研究が発達することを期待したい。

注

(1) この二分法は、Ragin(1987) によるものである。ただし、ライフコースをレトリックによる構成物と見なすならば、いわゆるフィクションも研究の対象となりうる。フィクションを通したライフコース研究の例として、見田(一九六五)、Plath(1980)、井上(一九九二)を参照。
(2) Denzin(1970)のように、「この二つの(あるいはもっと多くの)方法を組み合わせて用いること」「triangulation」を提唱するような立場もある(また佐藤(一九九二)も参照)。ライフコース論でこれを行なっている例としてHareven(1982)がある。

(3) 分析には、SPSS 4.0 のSURVIVAL プロシジャを用いた。統計量はサブグループ間の「生存度」の比較を行なうためのものである。統計量や確率密度の計算方法については、西脇・中嶋(一九九〇)を参照。事象の始まりの時点は出生時とし、センサーデータとしては、四〇歳以上で転職経験のない者と『生き方の変化内容』で変化なしと答えた者の年令を用いた。

(4) この時期に起きる転職は転職という形を取らないものかもしれない(大和一九九〇、一九九二)。

(5) 自由回答のアフターコードの方法については、佐藤(一九九三)、原(一九八八)、Lazarfeld(1972)、川喜多(一九七〇)を参照。本稿は当事者の解釈を重視するけれども、Blumer(1969)のような立場は取らない。どのような解釈も、語られ、記録された時点で、はっきりと

した形を持つのであり、明確な定義、分類が可能であると考ええる。
(6) 「現六五歳」とは調査が行なわれた一九八八年の時点での年齢である。

(7) トボスとは、コミュニケーションを行なう上で、土台となるような共通の知識や信念と定義しておこう(cf. Perelman 1977)。

(8) 以下の「安定」のレトリックも、自由回答中に、「安定」という語が存在するかどうかで定義した。境界的事例に関しては、そのような明確なコーディングの基準は用意していない。このようなカテゴリーを構成するために何度もカテゴリーの分け直しを行なったが、積極的に解釈(この事例には「安定」という語は含まれていないが、きっと「安定した」ということが言いたいのだろう、というような解釈)をおこなうよりも、ある語を含むかどうかで(すなわち、当事者のカテゴリーを重視して)分類したほうが、その他の属性との関連がはっきり出た。

参考文献

- Berger, P.L. and T. Luckmann. 1966. *The Social Construction of Reality; a treatise in the sociology of knowledge*. New York, 山口節郎(訳)一九七七『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』新曜社。
Blumer, H. 1969. *Symbolic Interactionism: perspective and method*. Prentice-Hall. 後藤将之(訳)一九九二『シンボリック相互作用論』勁草書房。
Clausen, J.A. 1986. *The Life Course: a sociological perspective*. Prentice-Hall. 佐藤慶幸・小島茂(訳)一九八七『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部。
Denzin, N. 1970. *The Research Act; a theoretical introduction to socio-*

gical methods. Prentice-Hall (3rd ed. 1989).

原純輔・一九八八・「非定型データの処理・分析」海野道郎・原純輔・和田

修一(編)『数理社会学の展開』数理社会学研究会・四六一―四七二・

Hareven, T. K. 1982. *Family Time and Industrial Time*. Cambridge U.P.

正岡寛司(監訳)一九九〇『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部

Hughes, E. C. 1958. *Men and Their Work*. Free Press (Reprinted in 1981

by Greenwood Press).

井上俊・一九九二『老いのイメージ』『悪夢の選択』筑摩書房・二八―四九

川喜多二郎・一九七〇『続・発想法 KJ法の展開と応用』中公新書

Lazarfeld, P. F. 1972. *Qualitative Analysis*. Allyn and Bacon. 西田春彦・

高坂健次・奥川櫻豊彦(訳)一九八四『質的分析法』岩波書店

Levinson, D. J. 1978. *The Seasons of a Man's Life*. New York, Knopf.

南博(訳)一九九二『ライフサイクルの心理学』講談社学術文庫

見田宗介・一九六五『スクラップの幸福と悲慘』『現代日本の精神構造』

弘文堂・一〇〇―一三三・

森岡清美・青井和夫(編)一九八四『ライフコースと世代』垣内出版

森岡清美・青井和夫(編)一九八七『現代日本人のライフコース』日本

学術振興会

直井優・佐藤裕(編)一九九五『新しい価値観と地域社会』

西脇二一・中嶋順子・一九九〇『SURVIVAL: 生命表分析』垂水共之・

西脇二一・石田千代子・小野寺孝義『新版SPSS X II 解析編1』東洋

経済新報社・二二八―二四九・

Perelman, Ch. 1977. *L'empire rhétorique*. Paris, J. Vrin. 三輪正(訳)

一九八〇『説得の論理学 新しいレトリック』理想社

Plath, D. W. 1980. *Long Engagements: maturity in modern Japan*.

Stanford U.P. 井上俊・杉野目康子(訳)一九八五『日本人の生き方

——現代における成熟のドラマ——』岩波書店

Plath, D. W. 1983. "Life Is Just a Job Resume?" *Work and Life Course in*

Japan Ed. D. W. Plath. State University of New York Press. 1-13.

Ragin, Charles C. 1987. *The Comparative Method*. University of

California Press. 鹿又伸夫(監訳)一九九三『社会科学における比

較研究』ミネルヴァ書房

佐藤郁哉・一九九二『フィールドワーク書を持って街へ出よう』新曜社

佐藤裕・一九九三『部落問題に関する表現の構造——人権意識調査の自

由回答項目の計量分析——』『解放社会学研究』七: 六三―八六・

Sorokin, P. A. 1959. *Social and Cultural Mobility*. Free Press.

土屋恵一郎・一九八五『社会のレトリック 法のドラマトゥルギー』新曜社

大和礼子・一九九〇『中年の危機の社会的創出』『年報人間科学』一一:

一一九―一三七・

大和礼子・一九九一『壮年期における年齢階層移行と役割実現不能感の形

成』『年報人間科学』一二: 八五―一〇二・

Change of Occupation as a Turning Point on Life Course

The aim of this paper is to clarify, 1) when turning point comes by change of occupation, and 2) what kind of content it has. The variable-oriented approach in life course research has not studied turning point on life course, because answerers' interpretations affect it, which has been considered "subjective" and inadequate to "scientific" study. But the author proposes that answerers' interpretations about their life courses are very important theme of the variable-oriented approach in life course research, because life course is not just a resumé but a rhetorical construction by answerer's interpretation.

Firstly, the author compares the timing of turning point by change of occupation between the sexes and the occupations by means of event history analysis. The result shows that distributions of the timing are different between the sexes, though null hypothesis is not rejected, and that the distributions are different between the occupations. Secondly, the author analyzes free answers about the content of turning point by change of occupation. The result shows that rhetorical features of the free answer have significant relations with sex and school career.

Key Words

life course, change of work, turning point, analysis of free answer, rhetoric

